六十一　いにしへの　奈良の都　の　八重桜　けふ九重に　匂ひぬるかな

伊勢大輔



ビルと桜

〈声に出してよんでみよう〉

イニシエノ　ナラノミヤコノ　ヤエザクラ　キョーココノエニ　ニオイヌルカナ

＊語頭以外のハ行の文字、つまり、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、**ワ行音**「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]

＊**「エ段の音＋う／ふ」**は、**「ヨー」**（前に子音がある場合には「ョー」）とよみます。したがって、「けふ」は「キョー（今日）」、「てふてふ」は「チョーチョー（蝶々）」とよむことになります。[2]

〈どんな意味だろう〉

昔の、奈良の都に咲いていた八重桜が、

今日は、京の都の九重（宮中）で色美しく咲き誇っているのだなあ！

＊「いにしへ」は昔、「九重」は宮中という意味です。

＊「**匂ふ**」（よみは「ニオー」）は、①色美しく照り輝く、②よい香りがする、という意味です。ここでは、①の視覚面の意味です。現代語の「匂う」は、②の嗅覚面の意味ですので注意しましょう。

＊文末の「**かな**」は、「…だなあ！」という詠嘆・感動を表します。現代語の「かな」と違って疑問の意味はありませんので、注意しましょう。

＊京の都と桜の花の華やかさを歌うとともに、「いにしへ」と「けふ」、「八重」と「九重」を**対比**させています。明るさに満ちた、**機知**に富んだ歌として知られています。[3]

〈解説〉

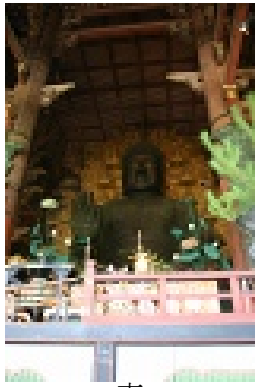
七一〇年、奈良に、平城京と呼ばれる都が造られました。奈良に都があった時代を「**奈良時代**」と言います。有名な東大寺の大仏が造られたのも、また、現存する最古の歌集である「万葉集」が作られたのも、奈良時代のことです。「万葉集」の次の歌は、平城京の繁栄を歌ったものとして有名です。

青丹よし　奈良の都は　咲く花の　匂ふがごとく　今盛りなり[4]

（奈良の都は、咲く花が美しく照り輝くように、今、盛んである。）

七九四年、京都に、平安京と呼ばれる都が造られました。以後、一一九二年に政治の実権が鎌倉の武士の手に移るまでを「平安時代」と言います。平安時代は、宮廷の女性たちを中心に、和歌や物語などの文学が大変栄えた時代です。これにはさまざまな要因がありますが、その一つに、当時の政治家（上層貴族の男性）たちが、自分の娘を天皇の后妃とし、やがて娘が皇子を生むと、その孫を天皇として即位させ、自分は天皇の祖父として権力を握る、という方法をとっていたことがあげられます。天皇の后妃は一人ではありませんでしたので、政治家たちは皆、自分の娘こそが天皇に愛されて皇子を生むことができるよう、娘を大切に育て、娘に仕える「女房」（侍女という意味です。現代語とは意味が違います。）にも優秀な人材を集め、その才能を開花させていたのでした。

この歌の作者の伊勢大輔（十～十一世紀頃）は、平安時代中期、時の最高権力者の藤原道長の娘で、一条天皇の中宮（皇后の別称）である彰子[5]に仕えていた女房でした。奈良の高位の僧から


東大寺


新幹線

中宮に桜の花が贈られてきた時、即興で詠んだ歌だと言われています。和歌は、このように社交の重要な道具でもあったのです。なお、彰子に仕えた女房には他に、和泉式部（→「五十六　あらざらむ」）、紫式部（→「五十七　めぐり逢ひて」）、赤染衛門（→「五十九　やすらはで」）などがいます。

〈作者と出典〉

「伊勢大輔」というのは、女房名、女房としての呼び名です。本名はわかっていません。女房名は、多くは夫や父や兄弟の官職などからつけられました。「伊勢大輔」は、父が伊勢神宮の神官であったことからの名であると考えられています。祖父は、大中臣能宣（→「四十九　みかきもり」）です。この歌の出典は、六番目の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である「詞花和歌集」（十二世紀成立）です。



京都

1 ハ行の子音は、八世紀頃に[p]から[ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて十一世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の[ɸ]が[w]と発音されるようになりました。なお、[ɸ]が[h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、十七世紀頃と推定されています。

2 二重母音は発音しにくいためです。この変化も、十一世紀頃のことと考えられています。

3 「奈良」と「京」の対比を加える説は、当時の発音は「京（きゃう）」は[kjɔ:]、「今日（けふ）」は[kjo:]で異なっていたため、賛同されていません。なお、[ɔ:]と[o:]の区別は、十七世紀頃には消失したと見られています。

4 作者は、小野老。「青丹よし」は、「奈良」の枕詞です。枕詞とは、和歌の修辞技法の一つで、ある言葉の前に付ける飾りのような、通常五音の言葉です。枕詞の意味や効果は、現代ではだいぶ分からなくなっているのですが、言葉というものの持つ魔力や呪術性に関連があるのではないかと言われています。

5 実際には訓読みの名であったろうと推測されていますが、読み方が不明であるため、音読みするのが習慣になっています。